



「武士の娘の誇りに生きる姿を演じたい」

シユタイヤー音楽祭2008 野外オペラ《蝶々夫人》

数少ないシユベルトの旅行は名歌手フォーゲルの故郷シユタイヤー

が中心だった。シユタイヤー川とエンス川の合流点に千年の古都の雰囲

気色濃く残したシユタイヤーの町がある。シユタイヤー音楽祭は通常ランペルク城で行われるが、初日(7月24日)は雨で市立劇場(550席)での開幕となった。セットが縮小されたものの音楽的には効果的で聴き応えがあった。ここ4年《椿姫》《オルフェオ》など主役を演じてきた中嶋彰子が、今年は《蝶々夫人》に挑戦。衣装、振り付けは日本から専門家を、脇役もなるべく日本人でいうことでスズキ役は新進の山本聖子だった(音量不足)。ピンカートンはメトロポリタン・オペラで活躍のロイ・コルネリウス、シャープレスはフォルクス・オーバーのダニエル・シュムルツハルト。これら3人がドラマを盛り上げた。中嶋は「武士の娘の誇りに生きる姿を演じたい」との意欲そのまま良かった。



楽屋で

だが、2幕冒頭だけ短いワンピースで煙草を銜え、自暴自棄的に見えたのは違和感があった。2つのアリアは素晴らしく聴衆は床を踏み鳴らしての最高の喝采を浴びせた。子供をしきりと出し、合唱は簡単な仮面でアジア人的雰囲気を出すというのは面白い試みだった(演出「スザンネ・ゾンマー」)。指揮のニルス・ムースは動所を押さえて若いウィーン・ベートーヴェン・オーケストラを巧みにドライヴした。オーストリア放送など報道関係者が詰め掛け、終演後中嶋はたくさんフラッシュをあびていた。

取材・文 野村三郎



シユタイヤー音楽祭《蝶々夫人》でタイトルロールを歌った中嶋彰子とピンカートン役のロイ・コルネリウス



シャープレスを歌ったフォルクス・オーバーのダニエル・シュムルツハルト



レセプションで